

海のジャンクシオン島 和華蘭文化の交差点く上五島く

吉村 政徳

長崎に住んでいる人たちが五島のことを思うとき、あのキリシタン史にまつわる唄「五島へ五島へとみな行きたがる五島は優しや土地までも」の民謡を想いだす人は多い。さらに西彼半島の大瀬戸に行くと「五島はよいとこ行って見りや地獄 二度と行くまい五島ヶ島へ」という盆歌の一節もある。

この二つの唄には、江戸時代五島に移り住んだキリシタンの人達の夢と現実を垣間見ることが出来る。



五島神楽(国選択無形民俗文化財)

その昔、五島の一部と崎戸大島の一部は共に、流罪の島でもあった。だから長崎人からは「悪かことばするもんはみんな五島んもん」と言われた時代があった。然し働きの五島人は長崎の街に進出し商いに励んで五島町をつくりあげた。「五島んもん」と島原んもんの通った後にはペンペン草も生えんよね」と言われた時代もあった。ひとくくりに五島といつても、五島列島は福江島・久賀島・奈留島の「下五島」と、中通島・若松島の「上五島」と大きく区分した方がよい。文化圏も経済圏も昔は下五島が長崎、上五島は佐世保を中心に文化の伝播や経済の流通が行われてきた。今も若干そ

の選択無形民俗文化財に指定されている。

神楽は平戸や壱岐の神楽と同じように舞神楽で、その舞の種類は三十分ある。神社の拝殿中央付近の畳二枚分の一間四方の板張りが舞台となる。そこからはみ出して舞ってはならない。さらに太鼓を叩く種類と吹く笛の種類は九州随一で複雑を極める。

五島の仏教にも歴史や伝統文化は多い。その一つが青方念仏踊りである。この踊りは福江のチャンココ、嵯峨の島のオーモンデー、平戸ジャンガラなど念仏踊りの古い形態を伝えるもので、本来の踊りの祖形とは斯くなるものと理解される踊りである。今ひとつが若松島極楽寺の国重要文化財となっている阿弥陀如来像。越中哲也先生によれば、この仏像は元々、五島の山王信仰の総社である雄嶽日枝神社(山王神社)のご神体で、明治の神仏分離令によって、極楽寺に下されたものであると言われている。この地区には山王文化圏とも言える史跡が多い。

上五島はどのように、日本古来の神道、大陸渡来の仏教、西洋伝来のキリスト教という三つの信仰が共存している島で、いわば和と華と蘭が紡がれた島ということが出来る。平成二十年六月、私達は、こうして伝承されてきた上五島の「神仏基」文化の伝統芸能を、「信仰の島、上五島の芸能」として国立劇場で公演させてもらった。これにより他国にはない上五島独特の歴史と文化と信仰が、芸能を通して全国に発信され注目を集めた。

特筆すべきものがもう一つある。五島うどんのことだ。五島うどんは上五島にあって下五島にはない。同じ麺文化でも下五島はダンゴ文化となり上五島はうどん文化となった。それは、「うどん」の原生産地は中国であり、其の昔、中国に遣わした我が国の船が帰国する時に最初の寄港地となったのは五島の港であり、其の港にうどんの製法を伝えたと言われている定説となっているようである。

他にも、上五島有川は其の昔、捕鯨の街として栄え、今も鯨唄や羽差踊りが奉納されるメーザイデン(弁財天)という行事があり、また坂本龍馬が江の浜に来た話や五島やぶ椿の話等もある。

しかし島は、今も観光があまり開発されていないシンプルな自然の島である。今流に言えば「シンプル・イズ・ベスト」。上五島はこれからもシンプルを「売り」にして生きて行きたいと考えている。

(上五島歴史と文化の会 副会長)

の傾向はある。

そんな上五島の歴史と文化の中に、ここ数年来、五島のキリスト教の教会群に一躍、光りが当り出した。それは「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が「世界遺産候補暫定リスト」入りしたことによる。さつそく役場には県と連携した「世界遺産推進室」が設けられ、巡礼者も多くなり観光ツアーが徐々に増加して島の活性化に繋がっている。関連イベントも多様になり教会堂での音楽会や映画祭が開かれ、ひと昔とは比べものにならないほど豪華になったクリスマス・イルミネーションが造られるなど。今、五島の島々は内外からの交流人口が右肩上がりになって「祈りの島」としての存在が大きく認知されつつある。

しかしこの上五島の歴史と文化をじっくり観てみると、キリシタンの島というイメージばかりが先行しがちだが、そうではない。島の教会をはじめとする宗教施設を数えてみるとそれが解る。教会堂が二十九棟、神社が五十七社、寺院が十三か寺ある。人口二万三千人ほどの島にこれほどの数の宗教施設が存在するのは、日本広しと言えど新上五島町だけである。その密度は全国自治体比で日本一だ。

神社は全国どこでも集落ごとに氏神が祀られているから、この数は理解できよう。お寺も複数の集落から檀信徒が集まり開山された経緯からこの程度の寺数になっている。それに比べて教会堂の数が極端に多いこと。人口約四十五万人の長崎市でもカトリック教会の数は三十棟というのに上五島のそれは群を抜いている。これは上五島の教会がキリシタン集落ごとに建堂された経緯に起因している。いわばキリシタン版鎮守の神様とでも言えようか。専門家によれば、このような集落ごとに教会堂があるのは全国でも稀有なのだそう。

神社に目を向けると、島民に人気の里神楽がある。上五島神楽という。主に秋の例大祭に神前に奉納披露されるが、平成十四年に福江、富江、玉之浦、岐宿、有川、上五島の六流の神楽が「五島神楽」として国

風信

○三月と言え三日の「桃の節句」と「お彼岸」である。桃は中国より其の昔我が国に伝えられたものとされている。中国でも桃には神霊が宿るとされ其の説話も多い。例えば「桃源郷」、「西王母と桃」の話などがある。中国の桃の伝説は我が国にも伝えられ「古事記」を読むと伊邪那岐の命が悪魔に追われた時、命は桃の実を投げて悪魔を追いかけた話や桃太郎の話が語られている。

○三月三日が何故「桃の節句」になったかということについても其の説話は中国に由来している。古代の中国では旧暦三月の初めの巳の日(上巳)は災がある日とされ、この災いを拂うために種々の行事をしていたが、魏の時代(二世紀末)に此の「上巳の日」を毎年三月三日に定め、此の日には「蘭草に浴し水辺に出て汚を拂う」とあり、此の風習が人形を川に流す風習となり、更に「上巳の日」には周の幽王が草餅(はこ草の汁と蜜を粉に和して作った餅)を廟にお供えした故事により、我が国では蓬餅を食べるようになり、桃も此の日に廟に供えたとされている。

○源氏物語・須磨の巻には光源氏が陰陽師にお祓をさせた人形を船に乗せ流すところがあり、之は現在の「ひな流し」の原型であり、やがて之は江戸時代の「ひな祭り」となったと記してある。

○先日、長崎日ボ協会本年度総会あり。新協会長に十八銀行頭取宮脇雅俊氏が就任。本年は日ボ修好一五〇周年に当るので其の記念事業として、長崎市よりサグレス号入港の事。平戸市よりカステラ・サミットの開催、本部主催の記念講演会・史跡見学会等の開催計画(案)の報告があった。

○今月は次の本を御寄贈いただいた。『海援隊秘記』織田毅氏著。織田氏が永年丹念に調査されてきた龍馬伝を良くまとめられ龍馬伝の研究に大いに参考になりました。(戒光祥出版・一、五〇〇円)

『江戸に伝わる昔ばなし』永田米吉(文)・亀淵佐喜子(絵)両氏の合作、平戸に伝わる昔ばなし「就学期の幼児期と母親のため」にふるさとに眠る口承文芸を取りあげ書かれていた。(平戸昔話研究会刊・一、五〇〇円)

『海峡の風』轟良子(文)・同次雄(写真)著。北九州を彩った先人・火野葦平。柳原白蓮・赤坂小梅・森嶋外等七〇人近くの人物を取りあげて記されていた。大いに興味を引かれる本でした。(エディックス社刊・一、二〇〇円)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

